

個性的な歌手は、その個性ゆえに 黒い花粉に塗れて逝ったのか

『黒い花びら』

昭和歌謡

誕生物語

第九回
文・山川晋

近年では話題にすんならなくなりましたが、昭和

歌謡界においてレコード大賞の権威は絶大なものだった。その記念すべき第一回大賞受賞曲が、切ないサクサスのイントロで始まる水原弘の『黒い花びら』だった。昭和34年(1959)のことである。

「もはや戦後ではない」昭和31年7月17日、証全文は『経済白書』で凱歌を挙げた。高度成長が公言された時代だ。

30年代、庶民は希望に燃えた。若者はアメリカ文化に嵌まり、ロカビリーに魂を奪われた。平尾昌晃、山下啓次郎、ミッキー・カーチス……彼らはスターとなった。

そんな中、異彩を放った歌手がいた。水原弘——黒の世界

ハスキーな低音は、夜間の色彩を演出した。咲いた花は「凄惨」だった。その花びらが散った時、歌手の始末も静かに消えていった。



狂っていた。そんなステージにひとり思づくめで登場、異彩を放つ男がいた。ドスの効いた声で、上目づかいでぶつきたらばうに唄う。それが当時23歳の水原だった。

昭和10年(1935)、深川区(現江東区)門前町町生まれ。高校卒業後に丹下キヨ子司会

のラジオ番組「素人ジャズ」と自慢で優勝。山口軍一の「ルアナ・ハワイアンズ」を経て、ダニー飯田率いる「パラダイス・キング」に加入。第2回

日劇ウエスタン・カーニバル出演の切符を手にする事になる。

ブームにはトコトン乗る——芸能界ならずとも、それが世の常だ。ウエスタン・カーニバル人氣に便乗した東宝が映画製作に乗り出すことになった。

タイトルは「青春を賭ける」、主演は夏木陽介。だが、水六輔と中村八大が作った『黒い花びら』は、従来の歌謡曲とテイストが違っていて夏木には歌いこなせない。そこで、ロカビリー歌手たちを集めてオーディションが行なわれ、結果、水原が選ばれることに。

ところが、レコードは発売後30万枚の大ヒットを記録。まだミリオンセラーなどなかった時代だ。さらにレコード大賞というオマケまで付いたことで、水原は一足飛びに芸能界の寵児へ。しかも同曲

は本人主演の映画(60)ともなり、それを潮に映画に色気をさせた水原の傾倒していったのが勝新太郎だった。取り巻

きを大勢引き連れ先斗町や祇園で飲み歩く勝。そんな勝から「これまでオレと五分につきあった奴はおミズだけだ」と言われたのがよほど嬉しかったのか、水原は勝にとこと

ん心酔していく。だが、栄枯盛衰。「黒い花びら」以降、際立ったヒットに恵まれない水原の人氣は低迷の一途を辿るばかり。それでも豪遊がやめられない。借金は膨れ上がり、いつしか、西の(藤山)寛美、東のおミズと噂されるように。結局、最後は運業先の北九州小倉で倒れ、42歳の生涯を閉じることになった。

歌と酒の日々を送り、無頼から破滅へとまっしぐらに歩んでいった水原弘。もし彼がこの曲と出合っていなければ……『黒い花びら』は水原の運命を翻弄させた、黒い花粉が奏でる葬送曲に変貌したのである。

Yamashita Chi

1962年東京生まれ、テレビ制作会社に勤務するフリーランス。著書に『東方神起の謎』『東方神起』『ビューティフル』『共にイーストプレス』『ビューティフル』『共にイーストプレス』(フリープレス)など。また、出版プロデュース作品として『生きる 藤原弘介(「スターアップ出版」)』『アキの社員(「扶養キル」(共にイーストプレス)など多数。